

〔研究ノート〕

雪村の奇思(2)—『本朝画史』の雪村観(その2)—

前回は、『本朝画史(伝)』の雪村伝が狩野永納の父である山雪(1590—1651)の記述になるものではないかということ指摘しました。今回もひきつづきこの雪村伝を読むことにします。

雪舟の筆法を慕って、ついに師弟の義を約す。学ぶところ天真を失わず。

雪舟は永正3年(1506)に87歳で没し、一方、雪村は永正元年頃に生まれたと推測されますので、雪村が直接、雪舟に師事したとは考えられません。雪村は雪舟の作品から筆づかいを学び、雪舟の天真に着目し、自己の天真を失うことがなかったと山雪は述べています。ここに言う「天真」とは、天から与えられた純粹な心を意味します。そのような心のままを言動にあらわし、つつみかくしのないことが、「天真爛漫」ということばです。『本朝画史』の中で、天真のことばで評しているのは雪村に対してだけです。

山雪は中国の画史、画論を研究し、『図絵宝鑑名録』を著述しています。『本朝画史』は、元時代の夏文彦によって編述された『図絵宝鑑』を範として書かれたものであり、その語彙も『図絵宝鑑』などの中国の画史、画論から採用されています。「天真を失わず(不失天真)」ということばも、実は『図絵宝鑑』巻四の北宋末の画家米友仁(1072—1151)の伝記に見えるものです。また、これは『画継』(宋、登椿著)の米友仁伝の記述を引用したものです。

ところで、米友仁の父である米芾(1051—1107)は高位高官であり、詩文書画ともに卓越した第一流の文人であり、また、すぐれた論画家でもありました。彼は職業画家の絵画に見られる形似性、技巧性に対し批判的で、五代宋初の画家で、天真爛漫な董源を高く評価しました。同じく天真爛漫な性

格の持主であった米芾は、画を全人格の投影とみましました。文人画は写意的(表現的)であり、天真の表現を目標とすると考えていました。董源画に画因を得たといわれる米芾の山水画は、『図絵宝鑑』によると、「天真発露、怪怪奇奇」と評されています。

雪村は職業画家であり、いわゆる文人画家ではありません。雪村画に文人画の特質である「天真」を見て取った山雪の目を見逃すわけにはいかないのです。山雪の目と同じ目で明治の岡倉天心は雪村を見ました。「雪村には、禪の理想のもうひとつの本質的な特性をなす、自由と、気安さと、洒脱味とがある。あたかも彼にとっては、経験のいっさいはひとつの遊戯にすぎないかの観があり、彼の強健な魂は、雄々しいもののさかんな横溢のすべてに喜びを感じることができた。」(『東洋の理想』富原芳彰訳) (林 進)

猿図 雪村筆

